

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2017
 課題番号：26381042
 研究課題名(和文) 教師のライフコースに関する継続的縦断的調査研究

研究課題名(英文) A panel survey of the Life Course of Teachers

研究代表者

山崎 準二 (Yamazaki, junji)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：50144051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本縦断的継続的調査から指摘しうるのは、日常の教職生活に内在し、教師たちの発達を支え促していく機能の存在である。勤務校における子どもたちとの出会いと交流、その経験過程で得られる先輩教師たちからの援助や助言、あるいは自分の子どもの出産や育児といった私的経験までもが、教師としての力量形成に大きな影響を与えている。このような教師としての力量形成と発達を支え促しているのが「発達サポート機能」である。
 現在、教職生活が多忙化し、職場や地域で授業研究活動に取り組むゆとりが失われてきている傾向にある。一人一人の教師の発達と力量形成を支え促していくためにも、その「発達サポート機能」の回復が必要である。

研究成果の概要(英文)：This panel survey points out the mechanism that exists in the teacher's daily life and helping to support teachers to develop their career. Not only meetings with children at the school to which a teacher is assigned, but also the advice that he or she receives from senior teachers in the process of teaching experience or even a woman teacher's personal experiences of childbirth and childcare, all of which give a great impact to teachers to create their capabilities as a teacher and are functioning to help teachers grow. It is a "supporting mechanism for development".
 Nowadays, the teaching life of every teacher is busier than ever, consequently, teachers have less time to participate in any lesson study activity at school and/or in the local society at large. We all must engender the recovery of the function of support to both support and encourage the development and competency-formation of teachers, which has existed in daily life activities and human networks.

研究分野：teacher training

キーワード：教師 ライフコース 質問紙調査 インタビュー調査 量的統計的分析 質的事例的分析

1. 研究開始当初の背景

新世紀に入り、困難かつ多様な教育問題が生まれ出てきたことに対応して、教師の養成及び現職研修に関する施策においても、資質能力の向上、実践的指導力の育成が強調され、最近では「学び続ける教師」像が打ち出されてきている(2012年8月28日中教審答申)。また、近年、大量のいわゆる「団塊の世代」教師たちの退職と同時に、教員採用状況が大都市圏を中心に好転してくる状況下で、若い教師たちが大量に学校現場に増加しつつある。教師の養成と現職研修に関する新たな政策的展開と学校現場でのコーホートの大幅な入れ替えが行われることによる教職としての職業文化と意識の変容という新しい状況的变化が生まれてきている。

こうした教師をめぐる状況変化を背景として、教師研究、とりわけ教師の発達と力量形成に関する研究は、従来にも増して重要視され活性化されてきている。本研究代表者〔山崎〕は、1984年の第1回調査時点を出発点として、ライフコース研究における手法に基づいて継続的縦断的に、約1,500名(第1回調査回答票数)の現職教師を調査対象者としてアンケート調査と量的統計的な分析を行うとともに、その中から世代と性の異なる教師たちに対してインタビュー調査と質的事例的な分析を行うことによって、教師の発達と力量形成の実態把握に取り組んできた。

このような長期にわたる継続的縦断的な調査研究は無く、この調査をさらに継続していくことによって、教師の発達と力量形成の実態解明を目指した本格的な研究を精緻化し発展させることができるという学術研究的な意義は大きいと考えた。また、こうした継続的な調査によって、教師のライフコースに関わる継続的縦断的な基礎データを収集・分析・蓄積していくこと、そしてその基礎データに基づいて教師の発達と力量形成を支え促すことのできるサポート体制を構

築する作業へ寄与していくことができるといふ政策的実践的な意義も大きいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、国立教員養成系学部の卒業生で小・中学校教師となった者(戦後新制学部最初の卒業生から5年間隔で12個のコーホート、約1,500名)を同一対象にして、これまで1984年第1回調査以来25年間に継続的に実施してきた6回のアンケート調査と2回のインタビュー調査の第7回、第3回調査実施を主な目的とするものである。今回、これら12個のコーホートにおける生活体験と教職意識の実態と変容を把握すると同時に、今回新たに第13コーホート(2012-2013年度入職、養成教育改革による実践現場参加体験を早くから持ち、教員採用状況好転期に入職した特徴を持つコーホート)を調査対象に加えた。教師の発達と力量形成の実態を解明し、それを支え促すサポート体制構築に寄与する継続的縦断的な基礎データの収集・分析・蓄積を行った。

このデータの収集・分析・蓄積によって、次のような3点での解明を目的としている。

第1は、1984年に始まった第1回目調査から数えて第7回目となる、同一の教師たちを対象とした(同時にそれぞれの調査回数時点で新たに入職してきた若い教師たちを対象者に加えての)継続的で縦断的な調査をさらに発展させ、そのことによって時代・年齢・生活経験の推移とともに変容していく教師の発達と力量形成、さらには教職意識の変容の実態解明を、一層精緻に解明していくことである。そのためには、これまでの6回(1984,1989,1994,1999,2004,2009の各年)にわたるアンケート調査結果と2回(1994,2004の各年)にわたるインタビュー調査結果とを新たに再分析しつつ、今回の調査結果と比較考察することも必要不可欠である。

第2は、近年、教員採用状況が大都市圏を中心に好転してくる状況下で入職してきた大量の若い教師たちが有する固有の教職意識等の特徴を解明していくことである。そのために、今回新たに第13コーホート（2012-2013年度入職、養成教育改革による実践現場参加体験を早くから持ち、教員採用状況好転期に入職した特徴を持つコーホート）を調査対象に加え、そのデータを他の世代（とくに教員採用減少期に入職した第10、11コーホート、このコーホートの特徴については第6回調査結果の分析で明らかにしてきた）と比較考察していくことが必要不可欠である。

第3は、今回の調査で、教師が実践経験の中で自己形成していく専門的力量的内実の解明に迫ろうと試みることである。ライフコース研究は、その研究方法における主要な分析概念である「時間」概念を用いるならば、「職業時間」ばかりではなく、「個人時間」や「家族時間」、そして「歴史時間」といった生活経験全体を視野に入れた中で、発達と力量形成上の諸課題を析出することを特長としている。今回の調査では、これまでの調査においても設問し続けて来たライフコース上の「転機（turning points）」に関する回答に一層焦点を合わせ、詳細な分析を行うことによって、その「転機」によって生み出されてきた教師としての専門的力量的内実の解明をめざしてきた。そのためにも、アンケート調査による量的統計的な分析に加えて、教師として歩んできたライフコースに関する詳細なインタビュー調査による質的事例的分析が必要不可欠であった。

3. 研究の方法

今回の本研究は、これまで継続的縦断的に取り組んできた調査研究作業と密接な連続性を有している調査研究である。具体的には、静岡大学教育学部を卒業し静岡県下の小・中

学校教師となっていた現職教師たちを継続的な同一対象として縦断的に調査実施するものであり、1984年実施の第1回目調査とそれ以降5年間隔で実施してきた6回の調査に続く第7回目のアンケート調査であるとともに、1994年及び2004年に実施してきた2回の調査に続く10年を経て後の第3回目のインタビュー調査であることの研究計画であった。

今回の研究は、従来の調査対象者から退職後10年以上を経過した第1～4コーホートを外し、第5～12コーホートと新しく入職し新任期にある第13コーホートを調査対象者として、彼(女)らのライフコースに関するアンケート調査とインタビュー調査を実施した。そのことによって、データの継続的縦断的な蓄積を図っていくと同時に、今回の調査結果をこれまでの6回にわたるアンケート調査及び2回にわたるインタビュー調査の結果と比較しつつ、量的統計的な分析を行い、集団及び個人の両レベルでの新たな変容の実態と特徴を解明することをめざした。

郵送による依頼と回答方式を採用した自己式質問紙調査の内容は、回答者の基本的属性に関する質問の他、大別すると、次の5つの領域にわたるものであり、調査内容の継続性の観点からして、基本的にはこれまでの6回の調査内容と同様である。すなわち、教職に就く以前の段階の諸問題、新任期段階の諸問題、新任期以降の教職生活全般に関わる諸問題、教職生活の中で形成される教職観や教職イメージなどに関わる諸問題、加齢等の人間的成熟や社会的出来事等の時代背景の影響に関わる諸問題、の5領域に関わる質問内容である。なお、この質問内容5領域は、インタビュー調査もまた基本的に同様である。

今回の研究においては、とくに教員採用減少期に養成教育を受け入職してきた第10、11コーホート（現在の30歳代教師）と教員採

用好転期を迎えてから入職してきた第12,13
コーホート(現在の20歳代教師)、それらと
比較する意味での第8,9コーホート(現在
40歳代教師)にとくに焦点をあて分析した。
アンケート調査による量的統計的分析によ
って、それぞれのコーホートとしての集団的
特徴を明確にするとともに、インタビュー調
査による集中的な質的事例的分析によって、
今後、新たな教師としての職業文化と教職意
識の担い手となっていくであろう上記各コ
ーホートの特徴を解明しようとした。この作
業は、若い教師に集中的集約的に表れている
今日の教師全体の発達や力量形成上の問題
点、あるいは職場や教職員集団の抱えている
問題点をも、逆照射していくとともに、これ
からの教師たちの発達と力量形成を支え促
すサポート体制の構築に結実させていくこ
ともになると考える。

4. 研究成果

【質問紙調査】

2014年8月に実施した質問紙調査結果(回
収率35.7%、676票)では次のような点が特
徴的であった。

(1)大学での学びについては、次のこと
がいえよう。第一に、どのGCでも共通
して、教育実習で子どもたちと接したことが
教職活動を進めていくうえでの基礎を培っ
た最も主要な経験となっており、大学での授
業から得た知識や経験も比較的高く回答さ
れていることから、大学における正課の学び
が教職キャリアに与える影響は決して小さ
くないということである。また子どもたちと
ふれあう経験と関連して、第二に、近年の若
手教員ほど、教育実習以外の実践現場への参
加経験をしており、活動の学校種は小学校、
大学や教育委員会が主催する活動が中心と
いうことである。教員を目指す学生による学
校ボランティア等の活動が推進されている
今日の状況を反映する結果であり、大学や教

育委員会の後押しによって、学生が就職を希
望する学校種を中心に活動している実態が
窺える。加えて第三に、こうした活動で得ら
れた成果として、基本的にはどのGCでも、
子どもの考えや指導方法などを知ることが
できたと回答されており、実践現場での参加
経験を通じて子ども理解が深まることが期
待される。さらに近年の若手教員では、教職
への意欲や教師の理解についても得られた
と感じている傾向がある。

(2)「初任者研修」での学びについては、
次のことがいえよう。第一に、どのGC
にも共通して、教材研究や指導案づくりなど
の授業に関する事柄について指導や注意を
されており、「初任者研修」全体の中でもよ
かったと感じていることである。こうした傾
向はとりわけ中堅教員に顕著であり、この世
代の教員は「初任者研修」において授業実践
に関わる力量の基礎を培っていたことが窺
える。他方で第二に、近年の若手教員におけ
る「初任者研修」の焦点は、子ども理解に関
する事柄が中心ということである。こうした
傾向の背景には、子どもをめぐる今日的課題
の多様化・複雑化とそれへの対応が迫られる
学校現場の実情が浮かびあがる。さらに第三
に、上記「初任校での支え」でも指摘したよ
うに、「初任者研修」においても、同世代の
教員と実践上の悩みなどを相談することが
自身の支えになると認識されていること
である。ただし、若手教員ほどその割合が低
くなっており、上記の結果に鑑みれば、年輩教
員や管理職の教員などを含む、多様な相手と
交流している近年の若手教員は、相対的に同
世代の教員を相談相手としない傾向がある
のかもしれない。

(3)既に退職した者を除いて「最近、ご
自分の実践上の『ゆきづまり』を感じたこと
があるか」及び「最近、『教師をやめたい』
と思ったことがあるか」とたずねた。前者「ゆ
きづまり」に関しては全回答者549人の60.7%

(333人)が、後者「やめたい」に関しては全回答者549人の38.4%(211人)が、それぞれ「ある」と回答している。GC別男女別にみると、「ゆきづまり」では若手教師と女性教師が、「やめたい」では年輩教師と女性教師の数値が、それぞれ相対的に高くなっている。両者の理由(指摘率の第1~3位まで)を、1984年・1994年・2004年・2014年の10年間隔の調査データから抽出し、さらに各調査年時点での年齢段階別に整理した。

最初に、「ゆきづまり」の理由に関してであるが、今回2014年調査では指摘率第1位に上がってきた項目に大きな変化が生まれている。すなわち、1994年調査及び2004年調査で年齢段階を問わず第1位に上がっていたのは「子どもの学力差に対応する」ことであったが、今回2014年調査では、20歳代~30歳代前半までの教師層においては従来どおりであったが、30歳代後半以降の教師層においては「特別な支援を要する子どもの指導」となった。最近10年間で、「発達障害児」の存在の認識、その子どもたちのいわゆる普通学校・学級への受け入れが進む中で、新たな課題が学校・教師に課せられてきており、その対応に困難を感じている教師が多くなっていることを象徴している。同時に、「子どもの学力差に対応すること」も若い教師においては第1位であり、中堅から年配の教師にとっても第2,3位に依然上がっていることも看過してはならず、全体として様々な個性や問題を抱えている子ども一人ひとりに丁寧に対応していくことが難しい課題であり続けている。

「ゆきづまり」に関しては、その克服要因(「あなたの支えになっている一番のものは何ですか」)もたずねている。10項目中から1つだけを選択してもらったのであるが、20歳代~30歳代前半の若い教師層においては、「経験豊かな年輩教師の励まし」が他項目を引き離して多く(20歳代前半:31.4%、同後

半:52.5%、30歳代前半:40.0%)「年齢の近い若手教師の励まし」や「家族・友人の励まし」が続いている。日常生活のインフォーマルな関係性が若手教師たちを支えているのである。

次に「やめたい」の理由に関しては、調査が進むにつれて、年齢段階を問わず、「仕事量があまりに過重だから」が次第に大きな位置を占め続け、ますます深刻な課題となってきたことがわかる。「仕事量が過重」は、離職の危機にも直結するほどの重大課題になってきているのである。同時に、30歳代~40歳前半の中堅教師層において、「仕事の量・内容に比べてあまりに賃金が低い」や「仕事内容に生きがいを見出せなくなった」という項目が上がってきていること、40歳代後半以降の年輩教師層では「自分の健康に自信がなくなった」という項目もまた上がっていることなど、「仕事量の過重」問題と深く関わっている課題として捉えていかなければならない。

【インタビュー調査】

今回の研究期間中の継続的インタビュー調査は、次のような特徴とインタビュー実施歴を持つ11人の現職教師に実施することができた。

《事例1:Q教師》(男、1983卒、「金八先生」世代、附属学校共同研究、社会教育、教頭・校長、1995.3.30、2004.8.10、2016.8.16) / 《事例2:S教師》(男、小から中へ、特殊学級担当経験、中学の“荒れ”経験、社会教育、教務主任、1995.8.12、2004.8.18、2015.8.17) / 《事例3:U教師》(男、1993卒、小・中への交互転任、院MC卒、国語教育、健康を害し休職するが復帰、1994.8.17、2004.8.17、2015.8.1) / 《事例4:V教師》(女、1992卒、小、新任1年目の失敗と克服、出産・育児経験、家族のリストラ・病気・不登校、1994.8.16、2004.8.26、2015.8.22) / 《事例5:W教師》(男、1997卒、小、不

登校体験、院 MC 卒、子どもとの格闘、障害児教育に従事、2000.8.14、2006.8.17、2015.8.11) / 《事例 6 : X 教師》(女、1997 卒、小・養護、教育系サークル活動、保護者との格闘、出産・育児、低学年指導、2000.8.2、2004.8.7、2015.9.13) / 《事例 7 : Y 教師》(男、2003 卒、小、初任校で「師匠」と呼べる先輩教師に出会う、教職大学院、2004.8.6、2017.8.29) / 《事例 8 : a 教師》(女性、2009 卒、特別支援学校教師、結婚、2011.8.15、2012.8.24、2015.8.12) / 《事例 9 : b 教師》(男性、2010 卒、小学校教師、2 校目に転任、初めての研究発表、2011.8.15、2012.8.24、2015.8.12) / 《事例 10 : c 教師》(男性、2013 卒、小学校教師、教職 3 年目、「叱ることが苦手」、2015.8.25) / 《事例 11 : d 教師》(女性、2013 卒、小学校教師、教職 3 年目、授業づくりに苦闘、2015.8.21)

以上 11 人に対する継続的なインタビュー及び若手教師に対する第 1 回目インタビューの実施であったが、全体的として次のような 2 点が特徴的であった。

第 1 は、40 歳代を迎えた中堅期教師たちが、共通に抱える課題であった。従来のインタビュー調査では、様々な問題(障害や不登校、問題行動など)を抱える子どもとの格闘・交流の中で自らの教師としての発達を実感してきた経験(職業時間上の経験)を多く語っていたことに対して、今回は夫・妻ないしは自分自身のリストラ・病気等や、自らの子どものいじめ・不登校等の経験(家族時間上の経験)が多く語られ、中年期における問題が浮かび上がり、今後、職業時間上の経験だけでなく個人時間や家族時間上の経験も結び付けた教師の発達研究の重要性が明らかとなった。

第 2 は、20 歳代の若い教師たちが共通に抱える課題であった。彼らは、大学時代から実践現場参加体験を有する世代であり、子どもとの交流経験も身につけて入職している。しかし、授業づくりや学級づくりの面において、

まだまだ先輩教師に頼ることが多く、「教えられる・指導される」存在から脱皮し、自立・自律した教師へと飛躍していくことに苦闘している。若い教師が、援助を得ながらも、周囲から自立・自律した存在として認められ、自信をもって成長していけるような環境と支援が必要である。

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

山崎準二、栗原峻、望月志穂、教職履修学生に関する 2017 調査、学習院大学教職課程年報、査読無、第 4 号、2017、pp.73-118.

山崎準二、教師のライフコースを読む、月間高校教育、査読無、2017、pp.82-85.

[図書](計 1 件)

山崎準二(分担執筆)、日本教師教育学会編・教師教育研究ハンドブック、査読無、2017、418(pp.10-13,18-21.)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 準二 (YAMAZAKI Junji)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：50144051

(2) 研究分担者

菅野 文彦 (SUGANO Fumihiko)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：30216288

長谷川哲也 (HASEGAWA Tetsuya)
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号：90631854